

特別分科会 (21日、西キャンパス本館)**(1) 〈文学〉：80年代中国／脱政治時代の知的再編——文学から見る——** 〈午前〉 26 番

企画・司会・討論：坂井洋史（一橋大学）

報告：郭春林（上海大学）：80年代の農村テーマ小説における脱集団化叙述について

許司未（一橋大学・院）：脱一元化の主体——張承志作品の中の民族と国家——

鈴木将久（明治大学）：ポスト文革時代における「政治と文学」

——「胡風名誉回復」を文学史的に考える——

1980年代中国の「ポスト文化大革命」というコンテクストは、思想界の課題を「脱政治」＝「啓蒙」一色に染め上げた。それまで政治イデオロギーに疎外されてきた価値観の「取り戻し」が急務とされ、「改革開放」という国是もそれを後押しして、「思想解放運動」の一大潮流を形成したのだが、当時の「新啓蒙」、「思想解放運動」は、基本的には素朴な「脱政治」、「脱イデオロギー」情緒に支持されており、時代のコンテクストに強く支配された言説として、偏向を抱えざるを得なかった。90年代後半以降、中国の文化界で発言力を持つに至った、即ち歴史を記述する権力と言説を独占しつつある世代とは、正にこの年代に知的形成を行ってきた世代である。彼らは80年代流啓蒙価値観を根拠に、体制イデオロギーに対する批判性を培ってきた。しかし90年代前半から体制イデオロギーは方向転換し、市場経済を導入し、資本主義化の道を進むことで、それまで抑圧の対象としてきた対抗イデオロギーすら体制内に取り込み、80年代的啓蒙価値観の具えた批判性を無意味化してしまった。その結果、80年代啓蒙世代は深刻なアイデンティティ危機に見舞われることになった。欧米型近代化を観念的に理想化し、文学領域では、社会的関心を意図的に排除した「純文学」を奉じ、かつての「政治の季節」への〈反動／反感〉から、結果として自らを政治的アパシーへと追い込んでいた彼らには、主流イデオロギーの180度転換といった「政治」のダイナミズムを理解することなど不可能だったのだ。今日彼らはこの空白を、自らをネガティブに規定する要素として自覚し始め、それを「政治の〈不在／無理解〉」として焦点化し、その克服を目指しているように思われる。本セッションではこのような基本認識に発し、文学領域に話題を絞り（農村文学、文学史、アイデンティティ）、「80年代」をいかに認識するかについての視点を提示してみたい。

(2) 〈政治経済〉：中国の土地と不動産の政治経済学

〈午前〉 36 番

企画・司会：丸川知雄（東京大学）

報告：梶谷懐（神戸大学）：農地転用と地方政府による制度間競争

中岡深雪（北九州市立大学）：住宅・不動産価格の高騰に関する考察

松村嘉久（阪南大学）：オリンピックは北京をどう変えたのか

討論：高見澤磨（東京大学）

中国の都市人口比率はようやく50%に達したところだが、GDPに占める第1次産業の割合はすでに10%まで落ちている。明らかに農村に人口が多すぎ、今後産業構造に合わせて都市化が進むのは必至である。都市化が進むなかで土地の価値が高まるであろうが、中国では都市の土地はすべて国有という原則があるため、(地方)政府は地価上昇の果実を独占できる可能性がある。地価上昇によって、土地の所

有者には巨万の富をもたらされ、土地を持たない人々は実質所得の低下をこうむるという現象はバブル期までの日本で体験したことだが、土地が国有であればそうした不平等の発生を抑えるとともに、より計画的に土地を利用できる可能性がある。しかし、土地の供給を独占する（地方）政府には腐敗の機会が与えられることにもなる。

市場経済のもとで土地が国有であることのメリット、デメリットをどう考えたらよいか。本分科会ではこの問題に対して中国の現状の分析から解答を与えることを目標としている。

(3) 〈映画メディア〉：中国研究と映画メディア

〈午後1〉26番

企画・司会・討論：晏妮(明治学院大学・非常勤)

報告：応雄(北海道大学)：ロウ・イエ映画における空間表現

張新民(大阪市立大学)：淪陥期の華北電影の巡回上映に関する一考察

韓燕麗(関西学院大学)：戦時中の重慶における官営撮影所の映画製作について

討論：白井啓介(文教大学)、菅原慶乃(関西大学)、晏妮

周知のように、近年来、映画、絵画、広告、漫画、アニメ、写真などの視覚文化が学術研究の対象としてますます重要視され、文字以外の表象を様々な角度から検証する研究は多くなされてきている。そうした中で、映画をどのように捉えるべきかという理論的探求も盛んに行われている。このように、学術分野における映画研究の位置付けが模索されている中であって、中国研究を対象とする本学会で特別分科会を設けて映画をとりあげるのは、とりわけ大きな意味を持ち、喜ばしい第一歩を踏み出したと言える。

本分科会の三つの研究発表には、ポスト第五世代を代表する映画作家の作品を映像学の手法を用いて分析する報告がある一方、映画をめぐる政治的、文化的コンテクストをふまえつつ、資料調査によって知られざる映画史の一部を浮き彫りにする報告もある。

応報告は、ロウ・イエの近年来の代表作である『天安門、恋人たち』と『スプリング・フィーバー』を中心に、作品中における人物と背景、雨、カメラの距離などに対する分析によって、ロウ・イエの映像空間の独特な性格を検討する。

張報告は、「淪陥期」の華北における「北支軍」、新民会と華北電影股份有限公司が行われた巡廻映写の状況を中心に、日本占領下における華北での映画普及と映画統制について検証する。

韓報告は、日中戦争期の重慶における中国政府の官営撮影所の製作による抗日テーマの劇映画にスポットを当て、官営撮影所の成立と拡大の実態を明かしつつ、製作された作品、特に映画に登場した敵としての日本人の表象などを分析する。

以上三つの報告を通して、中国映画研究の最新の成果を開示することに留まらず、さらに中国研究分野における映画研究の重要性を確認し、テキストとコンテクストとの関係、映像学と歴史学との交差など、方法論的にも再考を促す機会になることを期待する。

(4) 〈現代思想〉：世界システム論と中国現代思想——ジョヴァンニ・アリギの投げかける問い

〈午後1〉36番

企画・司会：緒形康（神戸大学）

報告：園田茂人（東京大学）：「北京コンセンサス」とアジア史の自己主張
石井知章（明治大学）：アリギ評価に見る中国革命と中国研究のパラダイム
與那覇潤（愛知県立大学）：中国化するアダム・スミス
討論：中山智香子（東京外国語大学）

近代の世界史を資本・ステイト・ネイションの相互関係から描いた世界システム論は、アジア史の視点からこれまでしばしば異議を唱えられてきた。例えばアブー・ルゴドが提唱したモンゴル世界システムは、その起源を16世紀のヨーロッパではなく、14世紀モンゴル帝国時代のユーラシア史にまで遡行させるものであった。現代中国について言えば、そうした西洋中心史観からの脱却の流れは、2000年にフランクの『リオリエント』が、2003年にポメラントの『大分岐』が紹介されて以後、2009年にジョヴァンニ・アリギの『北京のアダム・スミス』が翻訳されるに至って、一挙に加速された感がある。アリギが目指したのは、国家のイデオロギー装置の転換を重視するマルクスの議論ではなく、国家の市場コントロールによる世界システムの構築を主張したアダム・スミスの議論であった。社会主義市場経済という現代中国の経済イデオロギーを近代以来の世界システムの本流と捉え、近代を生み出した主要なプレーヤーとして16世紀以後の中国を加えることを説く『500年来、誰が歴史を書いてきたのか——1500年以來の中国と世界』の著者、韓毓海の議論にも、アリギの観点は大きな影響を与えている。本分科会は、現代中国に登場した世界システム論を、現代中国の社会構成体・支配イデオロギーの激変の中に位置付けることを主要な関心事とする。まず、こうした新しい世界システム論が登場した背景を、「北京コンセンサス」と「ワシントン・コンセンサス」をめぐる議論に探った上で、新しい世界システム論のイデオロギー基盤として、20世紀初頭以來の中国革命の変遷やそこで議論された国家と市場の諸関係に注目する。さらに、これらの問題を考察する参照枠として、韓毓海が「勤勉革命」と称する中国革命と、日本近代化論における価値規範との相互連関を取り上げる。最後に、現代中国の「新左派」による世界システム論を、欧米のニュー・レフトの思想潮流と比較してみたい。現代中国の思想状況の今後を占う上で、実りある討論を目指したく思う。

(5) 〈ジェンダー〉：現代中国におけるジェンダー・生育・人々の絆 〈午後2〉26番

企画：小浜正子（日本大学）、司会：江上幸子（フェリス学院大学）、
報告：姚毅（東京大学・非常勤）：伝統資源の利用とジェンダー秩序の再編

——産婦人科女医養成を例に——

濱田麻矢（神戸大学）：生育は女の絆をどう変えるか——王安憶の描くレズビアン連続体——

小浜正子：生育の医療化・国家化と家族の絆——「一人っ子政策」と母系家族の顕現——

討論：高嶋航（京都大学）

本分科会は、現代中国のジェンダー秩序の特徴と変化を、生育—リプロダクションを契機とする再編に注目して、考察する。国家の政策、伝統的規範や家族構造などのさまざまな要因は、生育の場に顕現する人々のつながりや家族のあり方、社会のジェンダー配置をどのように変容させたのか否か。本分科会は、文学作品や档案史料、フィールド調査などを素材として、異なったアプローチから複眼的にこの問題に迫る。

姚報告は、生育に関わる職業の性別配置の問題を考察する。現代中国では、政治動員や社会運動が激しい反伝統の様相を呈する一方で、産婦人科医師を女性と想定するなど「男女隔離」の伝統規範と親和性をもつ側面も見られる。この報告は、こうした伝統規範は、公式の「男女平等」の理念や女性を労働力として動員・活用する労働政策などどのような関連性を持っているのかに焦点を当て、黄宗智の「現代伝統」の視点から国家とジェンダー配置、文化交渉を考える。

濱田報告は、「生み育てる」という行為が女性同士の連帯に及ぼす影響を考察する。A・リッチは、女性同士の友情やつながりは女性の力の源となりうるものであり、それは本来レズビアン的なものだったという。そうした絆が中国の同時代小説にどう描かれているかを確認した上で、出産／育児がどのようにその絆を変容させたのか／させなかったのかを、王安憶『弟兄們』（1989）を中心に論じる。

小浜報告は、現代中国における生育の医療化・国家化や、計画出産の普及による子供の数の減少の結果、母子のケアのネットワークや家族関係はどのように変化したのかを、上海と農村での調査から考察する。子供は、産んだ女性のものか、家のものか、国家のものか。女性は、家族や、近代医療によって、守られているのか、ストレスにさらされているのか。

変化する現代中国の人々の絆とジェンダー秩序について、本分科会では多様な議論の材料を提供したい。

